

Title	増田四郎著「西洋中世世界の成立」
Sub Title	
Author	近山, 金次(Chikayama, Kinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1951
Jtitle	史学 Vol.25, No.1 (1951. 7) ,p.120- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19510700-0120">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19510700-0120</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

り好み、この方法は論理的に、法律的に厭はしいものであるが、最大多数の最大幸福のために必要と考へられ、ソヴィエットにとつて生死の問題であり、陰謀が粉碎されなかつたならばソヴィエットはチエッコ・ズロヴァキア、ノールウエー、オランダ、ベルギー、フランス等と運命を等しくし、日獨がソヴィエットのみならず英米をも破つたであろうと述べてゐる。

之等の議論は相當に問題の存する所であつて、此の書を読むことによつて寧ろ共產主義に對する自由主義の立場の相違を明らかにするのみであつて、著者の希望せる如くに二つの世界を調和せしむることが非常に困難なることを感ぜしめる。然しこの書が一九四六年二月に最初に出版せられて以來、一九四九年一〇月迄に版を重ねること七回に及んで居り、反ソ的な空氣の強くなつてゐる米國に於て相當に讀者を得てゐるのは興味あることである。

(田中荊三)

### 増田四郎著 「西洋中世世界の成立」

(岩波書店一九五〇年一〇月刊行)

この書に對する批判は既に若干の人々によつてなされてゐるし、著者の名も學界では周知のものであるし、また同書の課題や體裁から見ても之は入門的な史論なのであるから、此處では紹介

的な記述を一切避けて直接にその表現及び内容の問題に觸れて論じて見たいと思ふ。筆者が之までに耳にした同書の評判は非常によいか、非常に悪いか、何ちらかであつた。前者によれば著者の社會經濟史家としての研磨の跡が尠大な史實への沈潜と學說回顧の中に辿られ、その構造論的な把握は参考文献の豊富な照會と共に後進に幾多の貴重な示唆を與えるものであらうと言ふのである。ところが後者によるとこの書は徒らな大言壯語に充ち美辭麗句をつらねて言葉の遊戲をしているに過ぎず、從來の研究に比して何等の獨自性も見られず、獨語や佛語を無用に挿入したその銜學的な記述は必しも明確でないその論理と共に鼻もちがならぬと言ふのである。

由來こうした史論的な著述に惡意をもつて所謂あらを探せば限りのないものである。然し上記の評判は何れも筆者の知る限りでは著者と全然無關係と思はれる人々から出たものであつた。して見ればこの書は善惡何れにてもあれ、確かに問題の書であることは否定し得ない。それに歴史の參考書として如何に考うべきかについて學生諸君からも度々質問を受けた。幸ひ著者とは面識もあり、増田氏が後者の評する如き所謂にやけた人物でないことも屢々證言して來た自分としてはその評判のよつて來る所を改めて検討し、また同學の士としても氏の學風に十分な敬意を拂うに吝かなものではないが而も學說は學說として批判すべき義務を痛感す

るので、性來の怠惰に鞭ち敢えて一文を草する所以である。

「西洋史の研究者は兎角むづかしい表現を愛好する。本當にその内容がむづかしいのか、表現が稚拙なのか」と言う様な酷評を我々はよく先輩から聞かされた。この表現の問題は確かに我々が斷えず反省すべき一面をもつていと思はれるから、先づこの書について表現の問題から考察して見よう。ところで最初に主張して置きたいことは表現と言うものには人によつて「好み」があり、その「好み」は學説が十分表現される程のものである限り、或程度が自由が許されなければならぬと言うことである。自分の「好み」を他人に強いる如き態度は一般的にも好ましいものではない。終戦後、一般に筆をとる人がその固い叙述にいきとよむる様な意味合なのであらうか、時として文中に碎けた國語を使用すること、また平易な叙述を避けて殊更に大げさな表現を好む様なことが屢々認められる。氏の表現が屢々その抱負を述べる際に大見榮を切る様な印象を與えるのも或はその様なことの影響であるかもしれない。また「地中海世界」や「ローマ世界」を表すのに獨佛語は恐らく無用なものであらうし、「ジャスティファイ」「チヤンス」は日本語でも十分に表現出来るであらう。そしてまた文中隨所に現れる「するどい反省」とか「おそろしく現實的」とか「すぐれて動的」とか「きびしく指摘する」とか「徹底的な個別研究」とか言う言葉は「きつかけ」「ひつかけて」「のしあがる」

と言う様な表現と共に或は一部の讀者に不快の念を與えるのかもしれない。しかし全體を通じてその意圖する表現は眞面目に慎重になされて居り、課題にしても讀者をとまどいさせる如きものは何處にも存在せず、多少氣取つた辭句がないわけではないにしても、決して故意に至難な語をこねまはしたり、理論の綾を弄ぶ如き態度は認められないのである。ただこの様な小冊子にまとも上げるには極めて困難な時代を描寫しているため、全十二章が著者の筆力の下に結合せずば已まざるの意氣を示しているので、讀者は何時も各章の前後で著者が「しこ」をふんでいる様な印象をまぬがれないかもしれないのである。しかし私が問題としたことはその様なことよりも、この書が折角、一つの史論を展開しようとして居るのに徒らに参照文献を豊富に擧げて反つて入門的教科書の體裁をとつてしまつたことである。その論鋒は屢々典據を上げることによつてその説明を附加せねばならなくなり、折角、前を向いていたのが左顧右盼してしまつてしまふやうな感じがなない。加うるにこの様にそれぞれ立場の異つた學者の著述を無數に列擧されることによつて著者の主張が何れだけ強化されると言うのであらうか。それを讀んで感激して研究を開始しようと言う殊勝な學徒がいたと彼は恐らくその出發點に於てその探究に自信を失うであらうし、或は勇を鼓してその全部を讀破したとしても必や頭が混亂するばかりで失望落膽するのが落ちであらう。参考

書は著者の主張を裏付けるに必要なものだけで十分であり、入門者には原史料の操作こそ最も肝心であることを教えていただければ、それで結構であつた様な氣がするのは私一人であらうか。連續的な展望を續けるには困難な課題に敢然と肉迫されたそのたくましい營爲には全く敬服するが、通讀して見たところ、その表現はいかにも時代に對する概念を作るに急で而もそれが所謂「構造的把握」によるために精神的な展開を辿らうとせず、著者は、一途に史實に對する何等かの解釋を求めようとつとめて居り、史實そのものにその思考をとどめる餘裕を見せていないのが遺憾である。この書に關する限り著者は探究しようと言うよりも教授しようとしている。氏は西洋中世世界の成立についてキリスト教會の演じた重大な役割を認めることに於て吝かなものではないが、然し、そうだからと言って氏が必しもキリスト教會そのものをよく叙述して居られると言うことにはならない。その説明も第九章に於て至極簡單に片づけられては過ぎない。西洋中世初期の人々と共に苦しみ、人々と共に働き、人々と共に光明を見出した唯一の存在は殆んど其處に描かれていない。其處にはただ社會の斷片的構造が描かれては過ぎない。それは「社會科學としての歴史」の限界を示すものであらうか。

この書の表題を見てこの書を繙く者が必や少からぬ期待を抱く事柄の一つに *Romania* とか *Europa* とか言う語が史料の辿り得

る限りに於て何時如何なる事情の下に如何なる内容をもつて現れて來るかと言う問題があつてもよい筈である。しかるに *Romania* の意識も *Europa* の意識も史料操作に於ては何等説明されて來ない。ただ少かに *Romania* が *Albertini* の書によつて若干觸れられては居るものの、第四世紀末に出現すると言うことの典據については *Albertini* と同様に何等の論及も見られていない。またキリスト教會の具體的動向の記述を斷念されたことは遺憾ながらキリスト教世界としてのヨーロッパの出現を説明することを拒んでしまつた様である。*Romania* & *Europa* の史的意識こそ西洋中世世界の成立を説く者が何よりも先づ説かねばならぬものなのではなからうか。それこそ言はば「時代の聲」なのではなからうか。その様な世界的意識はその時代の有閑階級の思辨家の仕事であつたのであるから、社會構造の變革を考察する者には全く無用の長物に過ぎない、とまで恐らく著者は考へては居られないものと私に確信している。

次に内容に立入つて考察して見よう。

先づ第一に問題になるのは著者がとつて居られるフランク王朝が封建制度の世界であると言う概念が果して妥當なものであるか何うかと言うことである。かかる見解は曾てフランスの碩學クルランジュが堂々たる立場で展開し、而も各方面から痛烈な批判を浴び、殆んど今日では一般史學的に全く顧みられていない説なの

である。そのことは著者が屢々引用されるフェルディナン・ローにしても、また著者が封建制度の新しい概説書の著者として推賞されているカルメットやブロックにしても等しく認めているところであつて、之等の人々の著書を推賞して彼等の立場に何等の批判も加えられていない著者が何故にまた無言で古説を復活なさるか判断に苦しむものがある。恐らく封建制度の意味は經濟、法制、社會、政治の各方面に於ける事象の解釋より抽出される場合に相當のづれを見る筈のものであるから、その解釋の誤差には細心な注意が加えられねばならない。舊來の古典學說から經濟史研究、法制史研究の各分野で試みられた解釋を一應紹介し検討した著者は自己の封建解釋の一例を一六〇—二頁にかけて *Leudes* の變遷で説明されようとしているが、それは素直に見て *Leudes* が次第に私的なものから公的なものになつて行く變遷を辿つたにすぎない。要するに人的關係の展開の一部だけである。それは決して直ちに封建關係を示す現象ではない。しかも一六四頁の説明によれば要するに氏の説はグランドヘルシャフトの成立と封建制度の成立とを混同視されて居る様である。もしそれでよいのならば確かに「氏族制と古典世界との歩みよりとしての封建社會」の成立を説くのにカロリング王國と結びつけて試みるのが最もよいことになる。しかし我々が普通に封建制度下の莊園と言つてゐる様な莊園がこの時代に存在していたのなら兎も角、その様なものが

當時は何處にも見られないと言ふことになる問題は全く空虚な論に過ぎなくなつてしまふであらう。事實、カロリング朝はその様なものであつたからこそ崩壊し去つたのではなかつたか。これ第一の重大な疑問である。

次にキリスト教會の動向の問題について氏の叙述は幾多の疑問を提出する。氏の立場が全く現實に即した政治史的なものに終始されていることはそれでも結構であらうが、それならそれでその解釋に一定の限界を維持すべきで、事實を枉げてその解釋をおしひろめると言ふことは如何かと思ふ。例へば「皇帝教皇主義」がビザンツにしか存在しなかつた様に解して居られるが、これは是非、再考を煩したいところである。それではフランク王國の教會の動向を説明するのに困難であるのみならず、その様な立場で叙任權争を説明することは全く不可能であらう。また九四頁の「教皇權をめぐるビザンツとの間に云々」と言う句は具體的に何を意味されているのであらうか。一〇八頁「自由民の出身ではあるが極めて下賤な身分たる」一司教の記事が何うして自由の内容に關する事情の複雑さを示すものであらうか。一一〇頁の修道院經濟が果して合理的な一つの解決法と言えるのであらうか。西洋中世初期の修道院をそれほど經濟的に重要な單位として考えられるのであらうか。またその様に強いて見ようとするにしても西洋の修院運動の展開は一八六頁に示される様にイタリア中心でなく

て寧ろフランスを中心に解明せらるべきものであつた様に思ふ。文中、屢々教會の動向を説明するに不適當な表現を見る。三九頁の「ミラノ勅令及びニケア宗教會議によりキリスト教が公認せられて」とか、一九八頁の「レオ一世による西方教會獨立化」とか、一八八頁に教會と修院を「原理的に異なる」とと解する如きはその例で、記述の各所に見られる「聖界」とは「教會」のことと諒承されるが、「聖降誕祭」(一三二頁)なる語は奇異の感をまぬがれない。

第三にフランク王國の變遷の記述そのものに問題がある。フランク兩王朝の複雑極まる推移を短的に描くことは何人にも決して容易な業ではないのであるから著者の努力には十分の敬意を拂うべきである。然し史實との相違があると思はれる點はやはり問題とすべきであらう。著者は冒頭でクロヴィス改宗の動機を詮索して居られるが、これは嚴密に言つて史學的には不可能、宗教的には無意味のことではなからうか。それはさておき、その詮索で第一に氏はクロヴィス王が長子を失つたことによる動搖を指摘して居られる。しかし、グレゴリウスの史料(II, 28-30)にはその様な記事は何もない。詮索の第二に氏はクロヴィスがアラマンネン戦役の出陣にあたり神を求める氣持が極めて強かつたと記されている。しかし、グレゴリウスの史料では現實の苦戦の最中に改宗の動機が描かれていただけである。何れにしてもクロヴィスが當

時示している態度は史料に現れている限り躊躇、逡巡に充ちたもので、氏の説かれる如く情勢判斷に充ちたものではなかつた様である。それから後のクロヴィスの聖戰と云う動きが先づ對ブルグンド戰に現れて来る様に記して居られるが(一三四頁)、これは私の知る限りでは對ゴート戰(Gr. II, 37)に於てであつた様である。また氏はクロヴィス死後の分割相續を腐敗衰頹の遠因として簡単に説明して居られるが、この相續についてはその原理とは別に十分に考察するべき事情があつた様に思はれる。何れにしてもその結果「王國內にはメッツ、オルレアン、パリ、ソアッソンの四つの首都が出來た」(一三五頁)と云うのはランス、オルレアン、パリ、ソアッソン(Gr. IV, 22)とするか、後の歴史的經過を問題にするならメッツ、シャロン・シュル・ソーヌ、パリ、ソアッソンとせねばならぬ。次で氏はテウデベルト一世の動向を對部族關係から描き「東方の獨立化」と言う言葉を使用して居られるが(同頁)、恐らくその主張の根源は古泉學よりの考察によるものと推測される。しかしその野蠻な王の動向は現實に於て當時のイタリア問題から對ビザンツ關係に於てよりよく解明せらるべきものと思はれる。更にまたクロタル一世の統一を五六〇年とされているが(同頁)、これは五五八年、少くも五五九年の誤りであらう。また第六世紀後半のフランク諸公の政治的活動が「ビザンツ皇帝との秘密の連繫を保つまでに發展していた」と記されているが(一

三六頁)、斯うした動きはフランク史を通じて何時でも機會と能力さえあれば現れて來たものであつた様に思はれる。また五八七年に二度目の貴族の叛亂云々として *Andelot* の條約を描いて居れるが(同頁)、これは二度目どころか長い内亂の一つの結末ではなかつたか。更に時代を遡つて若干の問題を取上げて見れば一般にローマ聯合軍とフン族との決戦はシャロン・シユル・マルヌの近傍と言ふことになつて居る。然るに氏は「モーリアック近傍」(一二八頁)とされている。地點にかなり距離のあることであり、氏がその様な見解をとられた理由が問題となる。またポアティエ會戰の議論(二一四頁)は議論として氏の見解が古説を信捧して舊態依然たるものを示しているのは如何なものであらうか。この會戰の意義を過大視することに警戒を要するのは先年物故したプロツクも明瞭に指示しているところであり、回教徒のジブラルタル海峡渡航の模様などを睨み合せて見れば思ひ半に過ぐるものがある。次で氏は中世世界の成立を論ずるピレンヌの卓見を論評して居られるが、ピレンヌの書はその結語に於て古代的なものから脱皮した中世社會の到來を告げているだけで、「封建制度が突如としてそれを契機に成立した」(二一八頁)などと言ふ表現と結びつかねばならぬ必要は毫もない様に思はれる。

カール大帝の戴冠をもつて一應、封建制度の成立を認めようとする著者が最後の章で先づ大帝の戴冠を描くのは當然の順序と言

えるが、その二三〇―七頁の記述はビザンツ關係を見のがしてはいないのかかはらず、氏の考察は全く對内的に政治的な立場で終始している。この場合サリカ法典の序文など全く取るに足らぬ材料ではなからうか。氏の紹介されているアインハルトの「大帝傳」の前後の記述にこそ眼をとめていたできたかと思ふ。其處にはビザンツのことがそれこそ嚴然と書かれて居るのである。また氏は「カールの人柄は極めて現實的であり、理念的なもの、幻影を追つた形跡は、微塵も認められない」(二三八頁)と述べて居られるが、それは如何なる典據に基いて言はれるのであらうか。少くともアインハルトやアルクイヌスを通じて見られる大帝はアウグスティヌスの「神國論」を愛讀し、聖畫像論争に熱中する程の人物なのである。そして大帝が全く「予想に反し」て戴冠させられたと言ふ説(二三八頁)にもアルクイヌスその他の史料を通して承服しかねる節がある。二四一頁の帝名の譯語は原文と照合して見て奇異の感をまぬがれない。

愈々結末に及んで展開される著者の展望が甚だ不可解なものをもつ。二四五頁に現れる「帝權はドイツに、教權はイタリアに、學藝はフランスに」と言う言葉は何う見てもカール大帝時代の西洋の表現ではない。それを漠然とカール大帝時代にあてはめて見ようとしたところに一つの錯覺が起つて居る様である。ドイツの帝權などがヨーロッパの所謂封建制度の世界に何れほどの意味を

もち得たであらうか。政治的に、社會的に、經濟的に、文化的に、如何なる點から見てもそれは始んど問題となるものではない。それはフイロゲルマニストの描いた會ての夢想に過ぎない。中世の文化はドイツの帝權などとは關係なく英佛伊の世界にも花を咲かせる筈であつた。「全ヨーロッパのすべての國」がドイツの帝權を「共通の權威として仰ぎ、またそれに服した」などと言うのは全然、事實を無視したドイツ心酔者の空言にすぎないと思はれる。何故いつもあれほど慎重な著者がその様な言葉の魔術にかけられてしまはれたものか。

この様なことを列擧すると如何にもこの書が杜撰なもの様な印象を與えるかもしれない。然しそれはもう一度考へなほして見なければならぬ。時代から言つても史上空前の大轉換期を問題にし、時間的に見ても數百年の經過を縷述し、體裁から申しても三百頁に満たぬ小冊子に誤なき表現を與えようと言うことは始めから無理なのである。無味乾燥の年代記的敘述をもつて満足するのなら兎も角、この様な興味ある史論を展開しようとする場合に屢々著者の主張が史實を超えて議論の綾を織るのは珍しいことではない。殊に我國の様に學會の組織が貧弱で研究者各自がややもすれば孤立の狀態に置かれ、談笑裡に研究の成果を語り合う機會に恵まれぬ狀態に於て著者が十分にその主張を陶冶出來ないままに活字にしてしまうことは之また已むを得ない事情と申さねばなら

ぬ。そして更にかかる事情は著書が出た場合に一層いたましい結果を生んでいる様に思ふ。その書評と稱するものは多く儀禮的紹介か、或は非人間的な誹謗に過ぎない。一般讀者は良いか悪いかを知らされるのであつて、何れだけよいか、何れだけ悪いかは餘り問題とならないために、従つて盲從するか、反逆するかを擇ぶのみと言う場合が多い。我々はもつと健康な素直な明朗な空氣を望む。自分の過失や誤解が安心して披歴出來る様な研究の世界が欲しい。著者が敢て卑屈な謙遜を裝はなければ大言壯語の士としていやしめられ、評者が常に齒に衣をきせた様な表現を用ひ、且つ誤謬を誤植と言ひ換えなければ無禮不遜の士として、ひんせきせられる様な氣風は是非とも一掃したいものである。お互に素直に話し合えば分る人々ばかりである筈である。妙な世間體と言うものまで研究の世界に持込みたくない。

史實の誤認は大した問題ではない。人は得てして誤認することによつて理解する。私が誤認として指摘したことが案外、誤認でないかもしれない。もし然うだつたら是非敎えていただきたい。またそれが本當に誤認であつたら恐らく増田氏は素直にそれを訂正されるであらう。事實の誤認などは一部の論者が考へるほど史家にとつて致命的なものではない。優れた史家と雖も誤認はまぬがれないのである。ただ自分がこの書を通讀して抱かざるを得ない問題は著者の強烈な主張を裏付けんとする方途そのものが果して



妥當なものであるか否かと言うことである。氏は繰返し構造論的把握なるものを強調されるが、社會萬般の構造そのものが浮動してやまない此の様な時代の考察に然う言う方法が果して何處まで可能であらうか。何と言つても史的に「構造」と言うことは一聯の現象を俟つて始めて言えることなのであらう。現象そのものが、ややもすれば斷片的で而もまちまちになりがちな世界に何うして「構造云々」から立論し得るのであらうか。何かその論理には予盾がある様な氣がしてならないのである。且つ又その様な方法は一應うなづける叙述を生むとしても、事實を知れば知るほど然うした叙述のもつ意味は影が薄くなる様な氣もしないではない。この書が一部の讀者に不滿を與えたとすれば、正にその根據の一つは此處にあるものと推察される。要するにこの書の目的は「史論」であつて「特殊研究」の發表ではないのであるから我々は寧ろ軽い氣持でその主張に耳を傾けなければならぬ。我々は斯うした史論に、もう少し寛大な態度で臨むことを學ぶべきである。何も事實の詮索だけが史家の仕事ではあるまい。

筆者は著者の増田氏が年來積んで來られたドイツ中世經濟史研究の成果に對しては常に深甚な敬意を拂えるものであり、殊に氏の健康上の苦闘を想つてそのたくましい營爲に驚異の眼をみはるに吝かなものでないことを附記して筆を擱く。

(近山金次)

(一九五一年四月十九日)

## 史學研究會報告

第三九五回例會 卒業生送別會

昭和二十六年一月三十一日午後一時 於六番教室

國史

平安朝に於ける個人主義の自覺と厭世思想

内海 深君

豊臣秀吉のキリシタン政策

今井 多似君

東洋史

日唐交通路の變遷について

林 和男君

西洋史

十七世紀末から十八世紀初頭に亘るイギリス重商主義

飯田 義弘君

政策の特質

加賀美 久夫君

ルツターの贖宥提題について

高橋 巖君

獨逸ロマン主義國家觀の一考察

三浦 洋君

F. Rörig リュベックと市參事會制度の起源

大屋美知子君

英國の農村貧民と「改正救貧法」の性格

宮崎 六郎君

ピューリタン革命初期に於ける言論統制

米田 治君

マイネツケの國民思想について

平野 和男君

英國と米國(ブリトン教授)

篠塚 幸子君

「日本文明の由來」に於けるバックアの影響